

OPUS DEI — オプス・デイ

J.A. Armisen

THERE ARE MANY men and women in all walks of life who feel God's call to a life of Christian perfection in accordance with the evangelical counsels of poverty, chastity, and obedience; and yet in many cases, they do not feel that such a vocation necessarily entails giving up their ordinary work, or even leaving the "world." Opus Dei, means, of course, "Work of God." It is the name, in fact, of the first Secular Institute approved by the Holy See and which has recently begun its work in Japan. Its specific aim is to spread and encourage the life of perfection among people of all social classes. Its end, its asceticism, its theological foundations are neither new nor old; they are found in the Gospel; they are always valid. Jesus Christ was speaking to the men of all lands and of all the ages when He said "Be ye therefore perfect as your heavenly Father is perfect."

今日、カトリック界に多大の関心を喚起し、かつまた、日本において最近活動を始めた「オプス・デイ」会の主だった特徴について概述したい。

オプス・デイとは何か

オプス・デイとは、ラテン語で「神の業」という意味である。オプス・デイは聖庁により認可された最初の在俗会である。会の主目的とするところは、世俗にあるあらゆる階級の人びとの中に完徳の生活を広め、完徳の生活に至るようになることである。会の目的、犠牲、神学理論は特に変つていくものではなく、福音の教えを積極的にこなすことにある。すなわちイエスの「なんじらの天の父が完全な如く、またなんじらも完全なれ」というみ言葉は、すべての人びとに言われたことを思い、それを実践することである。

オプス・デイの会員について

当会は、清貧、貞潔、従順という福音の勧めを実践することにより、キリスト教的完徳生活への神の召命を受けたあらゆる階級の男女会員から構成されている。しかしこの召命は自分の職業を離れたり、世間を捨てたりすることを要求しない。1949年“Provida Mater Ecclesia”の教皇令が發布されるまでは、完徳生活という言葉は、志願者が修道会にはいり、規則に従って共同生活を送る時においてのみ使われた。しかし、かかる場合においては、入会前に、あらゆ

る在俗活動と世俗の職業をやめなければならなかった。それは“contemptus saeculi”（現世生活を軽視すること）が、修道的完徳生活にとって必要な要素であつたためである。オプス・デイおよび他の在俗会の設立は新しい完徳の身分について教会の認可を必要とした。オプス・デイの創立者モンセニョール・ホセ・マリア・エスクリーバ・デ・パラゲール初代総長の考えによる、俗人の会の設立は教会史上全く新しいことであつた。会員は福音の勧めを遵守し、使徒職を果たすことにより、世俗にあつて神に全く自分を捧げ、完徳の生活に至ることができる。しかも以上述べたことを、教会法的または、社会的にも身分を変えることなく（すなわち、会員は修道者にならない）、実践する所にオプス・デイの新しさがあつたのである。

さてオプス・デイの会員は俗人であるから、職業を放棄しないし、以前から行なつていた活動もやめない。ゆえに、オプス・デイは医師、弁護士、技術者、教師、労働者、農民など、様々の職業人より構成されている。会員は、工場、病院、役所や学校などで仕事を続けながら、かつ、その生活においては、キリストの教えに忠実に従い、模範と友情により、正しい使徒的活動を行なうのである。この行ないは、漁夫や織工や収税吏でありながら、また同時に使徒であつた初期キリスト教徒の仕事に似ている。

今日では、神に生涯を捧げるために世俗を捨てた聖職者の外に、このような、教会が採用した誠実に革命的な方法を実践することにより、この

世俗にあり、また世俗の中から神に仕え、各自の仕事に霊的修業への道具とし、常にキリスト教的気風を保つて活動し、究極において、親族、友人、仲間に良い影響を与えながら、完徳生活を行なわんとする沢山のキリスト教徒がいる。

オプス・デイは男子部及び女子部の二部より成立している。ともに同一精神を奉じ、同一の犠牲を捧げているが、両部は完全に別個で独立している。両部各々、全階級をもち、別々の明確な使徒的活動分野をもっている。オプス・デイに属している男女は社会のあらゆる階級をふくむ。結婚した者もまた入会できる。会員は身分に応じて私誓願する。教区付司祭もまた、オプス・デイの会員になることができる。教区の仕事を果たし、所属司教に完全に従順でありながらオプス・デイに所属している司祭はすでに沢山ある。

会員の霊的指導とその特殊な使徒的行為の発展のためにオプス・デイは男子部、女子部とも司祭を必要とする。男子会員はみな、一般社会の学問の他に、哲学および神学の全課程を履修しなければならない。この中、数年間その職業に積極的に従事してから聖職につくものもある。司祭に授けられる会員はすべて、教会学部門の博士号を前もつてとつておかなければならない。

オプス・デイの生活

オプス・デイの犠牲および使徒的特徴の主たるものは前述のことより推論できるであろう。会員と同一社会の他の人びととの間には外面的に相違はない。会員は他の人びとと一緒に生活し、ともに色々な問題を考え解決する。オプス・デイには秘密はない。会員は神への献身を公表しないが、隠しもしない。会員は修道者ではないから、修道服を着ない。修道者が、清貧、貞潔、従順を公誓願するのにたいし、オプス・デイ会員は私誓願をたてる。オプス・デイに関し秘密をみつめることはできないのはもちろん、当会は在俗会中最もよく知られた会である。1928年、スペインで創立されたオプス・デ

イは、今日では、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカおよびアジアに拡まり、会員は42カ国人にわたっている。

会員個々の仕事の他に、会であるので、多くの協同活動を行なう。すなわち、大学生のために、人格形成、職業教育、宗教的雰囲気をも助長する目的で、全世界にわたり、百余のレジデンスおよび寄宿舎、その他、種々なタイプの教育センター（大学、カレッジ、文化機関）、黙想会ハウス、国際的夏季講座、労働者および農民のための実業学校、医療センター等々。かくてオプス・デイの施設と会員は、近代社会のあらゆる階級に浸透し、その社会の中から熱烈で活気に満ちた感化をおよぼしている。

当会の、精神面についての、大変はつきりした特色は、政治、経済、職業等のような純世俗的事柄に関しては、オプス・デイは会員にたいし、如何なる決定的な意見をも強要しないことである。オプス・デイは政治機構でないので、公的生活に関与しない。精神的方面でまた、使徒的のみに行動するという目的に反するからである。しかし、もし会員がそうすることが適当と考え、また自らの発意と責任で行なうなら、会員が自分の国の公生活に従事することを妨げない。各会員はその国の国民であるがゆえに権利と義務をもっている。政治的問題に関し、意見を述べ、各自の思想をもつ完全な自由があることはもちろんである。政治分野で会員に課せられた制限は、教会の道徳と教義に従つて行動するという、カトリックの教徒誰にもあてはまる制限以外に何も無い。

たとえば、オプス・デイの会員が政府のある公職に選ばれたら、その事によつて会に累をおよぼすということなく、自分の社会的、経済的信条を実行に移すことができる。また会としても、個人の成功（失敗）による名誉（非難）をうけることはない。

結論として、オプス・デイは、世俗の中にあつて、キリスト教的完徳を求め、神の僕として働き、会に近づく人びとを神に近づけるために最善を尽くすカトリック男女の力強い活発な運動であらうといつてよい。